

高等学校における古典教育実践の展開

——大阪府立高等学校教諭Aの場合——

渡 辺 春 美

はじめに

高等学校における古典教育実践史の研究において、大阪府立高等学校教諭A（渡辺春美）を対象として考察を進めたい。Aは、大阪府立和泉高等学校にあって、国語科授業の活性化を求め、一九八六（昭和六一）年三月から文学教材の授業の改善に取り組み、併せて一九八八（昭和六三）年四月からは、古典（古文）教材の授業改善に取り組んだ。古典の授業の多くは、主題の基に複数教材を開発・編成し、理解活動と表現活動を関連付け、言語活動を多様に組み入れて展開している。一九九二年四月からは、大阪府教育委員会から鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教科・領域教育専攻（言語系コース）に派遣され、古典教育論を中心に研究を進め、一九九四年三月に修了している。修了後は大学院における研究を継続、発展させるとともに、古典教育理論史、古典教育実践史の研究に取り組み、それらに学びつつ古典教育の改善に取り組んだ。

本稿では、Aの一九八八年度以降の古典教育実践を対象として、

その内実をとらえるとともに、戦後古典教育実践史に位置付けたい。

一 古典教育実践研究の展開

（一）実践研究の歩み

Aは、自身の国語教育実践と研究の歩みを振り返り、第一期（一九七五年～一九八五年）文学研究試行期、第二期（一九八五年～一九九二年）国語科授業活性化の探究期(1)、第三期（一九九二年～一九九九年）国語科授業活性化の探究期(2)、第四期（一九九九年～）国語教育研究期の四期に分けている。

この内、第二期については「国語教育に本格的に取り組もうとした時期である。日々の国語教育を正面に据え、生涯の仕事として取り組もうと考えた。」^{*2}と記している。この二期は、文学研究から国語教育研究を中心に据えるに至った転換期であった。その切っ掛けは、十数年の教職経験を持ちながら、授業における生徒の反応の乏しさに対し、質問を易しくすることで対処しようとしたことにあった。その授業に対して、生徒の一人が、教科書をなぞることばかりやっ

ているとする不満の声を上げたのであった。^{*3}それは安易な授業改善に対する鋭い批判であった。国語科授業の活性化の探究は、この一人の生徒の声に促されて踏み出したともいえる。

実践研究の歩みの第二期・第三期が、高等学校にあって、活性化を求めて授業の改善に取り組んだ時期であった。活性化された国語の授業については、「①生徒が意欲的に学習の場に参加し、各自が、いきいきと活動し、発言し、聴きあうという、具体的な学習活動を通して、理解（感動）を深め、表現し、充実感、達成感を持つ授業／②授業における一連の学習の過程によって、学習者一人ひとりが国語の力を身につけ、自立した学び手として育っていく授業」と述べ、「この二つを併せもった授業を活性化された授業と考えたい。このような授業を実現することによって学習者に、言葉をおして豊かに生きる力を育みたいと考えるのである。」^{*4}とした。授業の改善方法については、「授業の実際を書きまとめることによって、①授業の活性化のための実践上の課題を見だし、②その課題解決のための工夫を授業で試み、③それを書きまとめることによって工夫の有効性を検証するとともに、新たな実践上の課題を得る、ということを繰り返しながら授業の活性化を確かなものにする。」^{*5}と螺旋的サイクルによる改善を実行している。このような方法によって、古典の授業改善は、第二期・第三期に集中的に取り組まれた。

(二) 古典（古文）教育実践の展開

高等学校における古典教育実践に関する報告は、次のように二期・三期を中心に行われている。

二期

①『源氏物語』指導の試み―古典に親しむ態度の育成を目指して―（『月刊国語教育』一九八九年三月（四月号）東京法令出版）

版）

②『源氏物語』指導の試み―班別学習による「愛と誇り」の学習―（『月刊国語教育』一九八九年九月（一〇月号）東京法令出版）

③『源氏物語』様々な愛の姿―の学習指導―古典の学び手を育てる単元学習の試み―（『月刊国語教育研究』二七一号 一九九四年一月 日本国語教育学会）

④古典入門期指導の試み―学ぶ意味に触れる授業を目指して―（『国語教室』一九九〇年一月 大修館書店）

⑤『伊勢物語』みやびの世界を歩く―の試み（第五四回国語教育全国大会第一九分科会（日本国語教育学会）一九九一年八月一日）

三期

⑥古典教材の授業活性化の試み―『大鏡』歴史を生きた人々の場合―（第三三回広島大学教育学部国語教育学会 一九九二年八月 広島大学教育学部）

⑦古典の授業活性化の試み―『日本永代蔵』の学習指導を中心に―（『和泉紀要』第二二号 一九九六年三月 大阪府立和泉高等学校）

⑧国語科授業活性化の試み―『枕草子』の学習指導の場合―（『研究紀要』三二号 一九九六年三月 大下学園国語科教育研究会）

⑨『徒然草』学習指導の試み―表現を軸として―（『国語教育研究』

第四〇号 一九九七年三月 広島大学教育学部光葉会)

⑩古典の授業活性化の試み―表現を軸とした『枕草子』の学習指導―『和泉紀要』第二四号 一九九八年七月 大阪府立和泉高等学校)

⑪場面をとらえ読みを深める古典の学習指導―『伊勢物語』(初冠)を中心に―『語文と教育』第二二号 二〇〇七年八月 鳴門教育大学国語教育学会)

Aの古典教育実践研究の展開は、これらの実践論考によって把握することができる。そのほとんどは主題単元学習としての展開であった。①～③は同一の実践における展開過程の異なる授業場面の実践報告、また実践を踏まえた提案としてまとめたものである。まず、(a)①～④、⑦及び⑨は、すべて主題とその下位に設定した小主題の基に教材を開発・編成し、主題の追求過程に理解と表現の関連指導を取り入れて授業を組み立てている。次に、(b)⑤⑧は主題に基づく授業としては①～④・⑨に同じであるが、指導過程を基本↓応用(↓発展)と段階的にし、主題の追求を軸とし、応用段階でグループ学習を取り入れて授業を進めて行った。さらに、(c)⑥⑩は、これまでの方法を生かすとともに、基本↓応用(↓発展)のそれぞれの学習活動でどのような技能を育成するかを考えて授業を組み立てた。他に⑪は、求められて行った一時間のみの研究授業を考察したものであるが、授業は主題単元学習として構想している。概括すれば、Aの古典教育実践は、おおむね(a)主題を軸にした実践↓(b)主題を軸にした段階的指導過程による実践↓(c)主題を軸にした段階的指導過程

程に学力育成を組み入れた実践へと展開したといえる。

二 古典教育論

以下、上記に述べた(c)段階の古典教育について、①古典教育観、②古典教育の方法、③古典を読む力について述べることにする。

(一) 古典教育観

1 古典観

Aは、古典を、人に応じ時に応じて立ちあらわれる多様で柔軟な価値を内包しているとらえている。その後、磯貝英夫^{*6}・大江健三郎^{*7}の文学観、浮橋康彦^{*8}の古典観、さらには関口安義の読者論^{*9}、益田勝美の古典教育論^{*10}、さらには、次の長谷川孝士の古典教育論にも学び、古典を次に述べるように把握するに至った。

古典は、文芸作品を含めて、時代を生きた人々の生活と精神の記録である。古典が、それ自体で価値を内包しているのではない。長谷川孝士の言うように、「古典を古典たらしめるものはない。読み手主体なのである。その価値も意義も、読み手主体がそれを発見し、引き出して、初めて存在するのである。要するに、古典から読み手への働きかけと読み手から古典への働きかけと、この相互作用のうえに、初めて古典が古典として成立し「機能する」と考えるのが妥当である。私たちは、「相互作用」を通して古典をイメージ化し、そこに様々な意味を見出す。それ

は、現代の生活と精神を相対化し、反省を促し、生きることへの指針、示唆を得させる。ここにこそ古典の生命があり、学ぶ意味が見出される。(渡辺春美「古典に対する興味・関心喚起の方略」『月刊国語教育』二〇一〇年一〇月 東京法令社 二二頁)

ここには、古典を、学習者との関係の中に立ちあらわれる関係概念とする古典観が見出される。このような古典観に立つとき、学習者の古典への積極的な関わりは、読みに不可欠のこととして求められる。その上で、豊かな古典教育は、①学習者と古典との出会いを確かなものとし、②学習者自らが古典を創造的に読み、感動・認識を深めることによって、その価値を発見できるようにするとともに、③学習者の古典を読む力を育てることを通して、④自立した古典の学び手を育てるところに求められる、と考えるに至った。

2 古典教育の方法

古典教育の方法に関しては、授業の活性化を求めて先行の実践、研究に学びつつ、試行錯誤し、検証して有効性を確かめていった。以下は、それをまとめたものである。

(1) 古典の授業活性化

古典の授業づくりは、学習者が興味・関心を持って取り組む授業づくりによって初めて可能になる。そのためには、適切な教材の開発、編成のほかに、授業づくりの基礎として、授業の、ア. 個別化、イ. 活動化、ウ. 協同化、エ. 創造化 オ. 発展化を考えた。

ア. 個別化―学習をできるだけ個々の学習者に合ったものにする。そのために、教材の複数化、学びの方法の複数化を行い、学習者個々が自らの学習を選択し、生き生きと学習できるようにする。

イ. 活動化―主体的、積極的に、学習者自らが課題を把握し、解決していく過程で、話す・聞く、読み、書く活動を、個別、あるいはグループ別に行うようにし、積極的に取り組みつつ、言語能力をつけられるように活動を取り入れる。

ウ. 協同化―学習者が協同で学習に取り組み、対話、交流することとおして、学習が深まるように授業を作る。

エ. 創造化―学習を創造的にする。再話、創作、リライト、作中人物への手紙、作中人物の日記、続き物語の創作、劇化、絵画化などを目標に応じ有効に用い、楽しい学習にする。

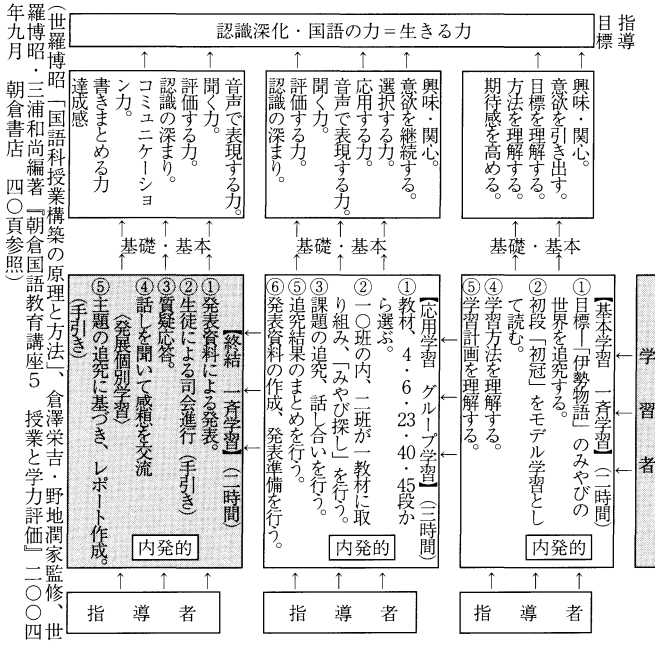
オ. 発展化―理解から表現への発展的関連指導を取り入れたり、基本↓応用↓発展などの段階的、発展的指導過程に、一斉、グループ、個別と指導形態を対応させたりして学習を主体的にし、効果的にする。

以上を、部分的に取り入れたり、組み合わせたりすることによって、生き生きとした、楽しく、充実感のある古典の授業にする。このような授業作りによって、古典に親しむ授業づくりが可能になるとする。

(2) 目標の二重構造に基づく言語活動の組織化

古典の指導計画を、生き生きとした授業づくりの方法によって行いたい。次表のように、学習者が古典の読みに積極的に取り組み、

理解（感動）を深め、学習に充実感を持てるように指導する。とともに、指導者は、指導の過程で、興味・関心、意欲や目標達成の意識に貫かれた言語活動を組織し、聞くこと・話すこと、読むこと、書くこと、および言語事項に関する国語の力を育成することを目指す。



上記の通り、目標を、学習者の目標と指導者の目標の二重構造にし、授業の構造を二重にする。そうすることによって、古典に親しみ、人間や現実に関する認識を深め、文化の根を発見するとともに、国語の力を身につけることが可能になる。目標の二重構造化は、古典を活かす国語科の授業として有効な方法であるとされている。

(3) 授業への学習主体の位置づけ

生き生きとした授業づくりの基本に重ねて、古典の授業づくりは、以下のように、学習者の主体的参加を重視するものとなっている。

① 学習者を伝統的な言語文化を学ぶ「主体」として学習指導を行う。

授業づくりでは、その基本として学習者を「主体」として授業に位置づける必要がある。学習者が、伝統的な言語文化に興味・関心を持つて積極的に関わり、創造的に学ぶように工夫する。

② 学習者の実態に即した古典作品の教材化を行う。

学習者を「学習主体」とするためには、興味・関心を育てるとともに、進んで読みたくなる教材、驚きがあり、発見がある教材、また、深く感動する教材などの開発、編成が必要である。また、言語抵抗を少なくするために、現代語訳を用いたり、傍訳教材を用いたりして、教材の価値を学習者が自ら感じとらえるようにしたい。

③ 古典教材と学習者の出会いを演出し、興味・関心を育てる。

学習の入り口で教材との新鮮な出会いをさせることが大切である。出会いを演出することによって、学習への期待感を高め、教材への興味・関心を育て、意欲をもって教材に取り組もうとする姿勢を育てることができる。そうすることによって、学習は内面化し、学習

の質も高まることになる。

④学習者が主体的な活動を行い、表現を通して教材との関わりを強める言語活動の場を設ける。

教材との関わりを強めることによって古典は、学習者の中で生命を得ることになる。その継承と創造もこれなしには成しえない。読みなれるための音読、また、考え感じたことを表現する朗読、集団で読み方を検討し、読みを担い合う群読も教材との関わりを強める方法である。また、訳詩、絵画化、劇化、漫画化などの創造的な表現も、楽しく古典教材との関わりを強めることになる。

⑤主体的な学び手の育成のために、学びの方法を学ばせ、身に付けさせる場を設ける。

学習者は、古典に親しみ、生涯にわたって学び、自らの言語生活を豊かにする。とともに、古典の継承、発展に関わっていく。そのためには、主体的に学ぶ学習者を育成することが必要になる。例えば、指導過程を基本↓応用↓発展と、段階的、発展的にし、知識・技能を活用する場を設けるといったことが大切になるとする。

3 古典を読む力の明確化

古典を読む力の明確化について、Aは、『伊勢物語』の学習指導の反省の中で言及している。^{*12}伊勢物語の実践では、基本↓応用という指導過程を取っている。ここで「基本」とは何かを問うことが、古典を読む力の明確化を求めることにつながったと考える。

後には、増淵恒吉・田近洵一の学力観に学び、古典を読む力を知識・技能・態度に分けて、次のようにとらえるに至った。^{*13}

「知識」には、①言語要素、②言語表現、③古典に表れる生活・社会、有職故実、宗教、④古典の書かれた時代背景や時代思潮に関する知識が含まれる。また、「態度」については、①古典への興味・関心、②古典に親しみ、進んで読もうとする態度、③古典を読むことによって、豊かに生きようとする態度が考えられる。「技能」については、次のようにとらえられる。

①文章の内容のあらましを、よりすばやく、よりの確に把握する能力。

②語句の意味を理解する能力。

a. 自己の経験とことばとを結びつける能力。

b. 辞書を有効に利用する能力。

c. 語句の意味を文中に定着する能力。

d. 漢字の構造・語句の構造を理解し、それを応用する能力。

e. 助詞・助動詞の文中における意味・用法を理解する能力。

③文の組立をとらえ文意を明らかにする能力。

④指示することばが文中の何を指しているかを指摘する能力。

⑤文と文との接続関係をとらえる能力。

⑥文・文章の内容と表現の強弱軽重をとらえる能力。

⑦必要ならば、注釈書、参考書、口語訳を利用する能力。

⑧表現形態に即した読み方をする能力。

A 主として論理的文章の場合(略―渡辺)

B 文学的文章の場合

a 作品の形態や傾向に応じた読み方ができる能力。

- b 作品のあらすじをとらえ構成を読み取る能力。
 - c 作中人物の思想や性格、心理の動きを読み分ける能力。
 - d 文体の特色や表現のうまみなどを感得できる能力。
 - e 作品を通して、ものの見方・感じ方・考え方などを読み取る能力。
 - f 主題を読み取る能力。
- ⑨ 読んだ古典を批評する能力。

三 古典教育実践

Aの古典教育は、先に見たように、(a)↓(b)↓(c)と展開した。ここでは、(a)段階の『源氏物語』の実践、および(c)段階の『枕草子』の授業実践をとりあげる。それによってAの古典教育実践の展開と到達をとらえることができる。

(一) 『源氏物語』の授業実践

Aは、一九八八年度に、一年間にわたり三年生二クラスを対象に五〇時間をかけて、『源氏物語』の授業を行った。

1 目標

目標は、ア・源氏物語を興味を持って、楽しく読めるようにする、イ・登場人物たちの様々な愛の姿を読みとり、自分なりの感想を持つ、ウ・愛の在り方や人生についてのものの見方、感じ方、考え方を深める、エ・生涯にわたって古典に親しむ態度を養うという四点である。

2 目標達成の工夫

目標達成のために、①学習テーマの設定と教材化、②理解と表現の関連指導、③『源氏物語ノート』(学習記録)を指導の工夫とした。

3 教材化

教材化は、次のようになされた。『源氏物語』は、人に応じ、時に応じて、様々な姿(主題)を見せるとし、生徒の関心・興味を引く主題、共感あるいは反感によって自らを確かめ得るような主題、刺激と揺さぶりにより自らを問い、考えを深めるような主題に貫かれた場面を切り取り、教材とする。それらを関連づけたり、比較対象したりすることによって、読みは深まり、ものの見方、考え方、感じ方が深められる。それを実感することによって、古典に親しみ人生を豊かにする態度は自然に育つと考えた。

4 授業の実際

「様々な愛の姿」をテーマに、「世の中のしくみと愛」(桐壺更衣と藤壺)、「愛の不思議―従う女と従わぬ女―」(夕顔と空蝉)、「愛と不信」(紫上の物語、「母の愛」(明石の女君と姫君)の小テーマを設定し、関連した現代の参考文、感想文も教材としつつ、興味・関心・問題意識を高め、読みに向かわせ、表現と結び理解を深める授業を試みた。一人の生徒は、「源氏は物語に登場する様々な女性と愛からくる苦悩を共にし、様々な女性にその人々にそれぞれの対応の仕方を私達に見せてくれました。源氏の苦悩は多かれ少なかれ私達の社会にも共通するものを含んでいます。」(M・H男)と述べている。多くの感想文に『源氏物語』への共感・驚き・感動が述べられ、生徒は、人間について、その生き方について、愛について、

社会について考えを深め、読み手として成長していったと思われる。

5 学習指導の成果

この学習指導は、学習テーマに基づき、本文を読むことによる理解Xと、参考を読むことによる理解Yとを、突き合わせて感想を書く。さらに授業者の評言と、生徒の感想文（二名印刷配布）を読み、自己の理解と比べ考えることで、いつそう深い理解Zに至ったものと考えられる。授業後には、学習テーマは、読みの観点として働くとともに、状況をとらえる観点としても働くことが考察された。また、生徒の関心を引くテーマに基づく教材化の有効性を問うものともなっている。

(二)『枕草子』の授業実践

一九九四年二学期に、学習テーマ『WHO ARE YOU・清少納言?』『枕草子』を読む¹⁴」の基に授業実践を行った。

1 授業のねらい

学習指導上のねらいは、ア. 清少納言の五つのエピソードに関するスピーチによる興味・関心の喚起、イ. 基本↓応用を軸とした段階的指導過程、ウ. 枠組み作文に関する学習の手引きによる小論文の書き方、エ. 章段（類聚・日記・随想）の性格に合わせた読みの試み、オ. 古典を読む力の措置と育成の五点に絞り、実践を通して有効性を探ることにしている。

2 教材

教材は、指導過程に従って、次の通りに編成している。

(1)一斉学習Ⅰ―基本（類聚的章段）

「にくきもの」（教科書『古文 枕草子 大鏡 源氏物語』一九九四年三月 三省堂）

(2)班別学習―応用（類聚的章段）

「すさまじきもの」（二三段『日本古典全書 枕草子』以下同じ）
「心ゆくもの」（二九）
「にげなきもの」（四三）など二二段。

(3)一斉学習Ⅱ―基本（日記・類聚・随想的章段）

「閑白殿黒戸より」（二二四 教科書・「鳥は」（一九三）
「男こそ、なほいろありがたく」（二五一 教科書）

(4)班別学習―応用（日記・類聚・随想的章段）

ア. 清少納言の人生観（宮仕え論）―「生い先なくまめやかにえさせいはいなど見てみたらむ人は」（二二）
イ. 清少納言の宮中生活Ⅰ―「二月つごもりごろに」（二〇二）
ウ. 清少納言の言語観―「ふと心おとりとかするものは」（一八八）
エ. 「文ことはなめき人こそ」（二四六）
オ. 清少納言の宮中生活Ⅱ―「職の御曹司におはしますころ、木立

ちなど」（七四）

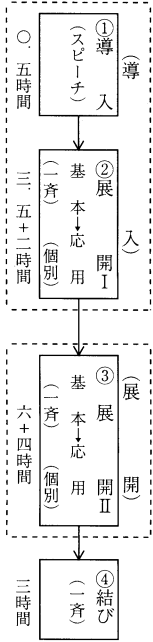
など」（七四）

など」（七四）

オ. 清少納言の美意識―「木の花は」（三四）

3 指導過程

指導過程は、次の通りである。



指導過程は、「導入」→「展開Ⅰ」を「展開Ⅱ」の導入ともなるように構造化している。指導過程に沿った学習活動によって古典を読む力を育成しようとした。

① 導入では、ア 清少納言は新しい女、イ 紫式部の清少納言観、ウ 悲劇を乗り越える強い精神力の持ち主、エ 光り輝く子どもの描写、オ 高い知性の持ち主というテーマで五分程度話をし、メモを取らせた。

② 展開Ⅰは、まず基本学習として「にくきもの」を読み、「にくきもの」に対する清少納言と自己の考え方を比較し、清少納言像を考える。応用学習として、類聚章段の計二四段の題の意味を全て調べ、一つを選んで題名として表現する。同題の清少納言の文章と比較し、感想を書き、清少納言像について考えさせた。生徒の表現は印刷して読み合い、感想を持たせることを行った。

③ の基本学習では、モデル学習となるよう心がけ、表現形態に応じた読みを行った。日記的章段は、歴史的背景を考慮し、類聚的章段は、挙げられたものを類別し考察を加えた。さらに随想的章段では、歴史的背景への配慮とともに、自己のものの見方・考え方・感じ方とも比較させるようにした。

応用学習は、ア 文章形態に応じた読み、イ 比較・分析的読み、歴史的・文化的背景を考慮した読みの方法を学び、応用することを中心的な目標として展開した。

③ 展開Ⅱの学習活動と育成すべき学力とを対応させてまとめれば、次の通りであった。

③ 展開Ⅱ	
学 習 活 動	<p>(1)「関白殿黒戸より」は、歴史的背景を考慮しながら、清少納言がこの段に込めた思いを読み取る。</p> <p>(2)「鳥」は、挙げられた鳥を類別し、分析することで清少納言の美意識を考えらる。</p> <p>(3)歴史的背景をも考えながら、自己の考えとも比較し、清少納言の考え方をとらえる。</p> <p>(4)班（一〇班）ごとに担当する教材を選択し、各二班が同一教材を選択。</p> <p>(5)班で教材を読み、話し合ってまとめ、プリントし配布。まとめは、ア 章段の要約、イ 文法・語句の意味、ウ 参考（背景の説明）、エ 清少納言の見方・感じ方・考え方のまとめからなる。</p>
学力育成	<p>◇作品のあらすじをとらえ構成を読み取る力。</p> <p>◇作品の形態や傾向に応じた読み方ができる力。</p> <p>◇作品をおして作者のものの方・感じ方・考え方などを読み取る力。</p> <p>◇文体の特色や表現のうまみなどを感得できる力。</p>

④ 結びは、「清少納言の人物像」という題で小論文を書かせる。書きづらい生徒には、枠組み作文の手引きを与える。最後に、学習の振り返りとともに、達成感を求めて学習の記録を各自冊子にする。

4 成果と課題―工夫を中心に

授業にあたり、五つの工夫を設定した。

ア 清少納言に関する五つのスピーチや、類聚的章段一つを選び清少納言と同一のテーマで書いて比較する活動などによって興味・

関心を一定喚起することができたと考える。イ 指導過程を基本（一斉）↓応用（班別）とすることで学んだ力を応用して言語活動に取り組みとともに、つけるべき学力の意識的な育成を心がけた。段階的指導過程は、主体的な言語活動の場を応用段階に組み入れることで生きて働く力の育成に効果があると言えよう。ウ 枠組み、作文による手引きを作成したことが、整った小論文を書くことにつながったと考える。エ 章段（類聚・日記・随想）の性格に合わせた読みは妥当であったと考えるが、その成果については実践を重ねて検証する必要がある。オ 古典を読む力の育成についても、今後の観察、調査にまたねばならない。

おわりに

Aは、授業の活性化を求めて、先行の理論や実践に学びつつ古典の授業を展開した。方法（工夫）の有効性を実践を通して検証し、授業の活性化を確かなものにすることを目指した。古典教育に関しては、関係概念としての古典観に基づき、学習者による古典の創造的価値発見を目指す古典学習指導を求めて実践を重ねた。学習者を古典を学ぶ主体として位置づけ、興味・関心・問題意識を重視し、それら喚起する教材の開発・編成を学習テーマを軸に行い、基本（一斉）↓発展（班別）↓応用（個別）とする学習指導過程に沿って、認識の深化と学力の育成を追求し、生涯にわたって古典に親しむ主体的な学び手を育成しようとしたといえる。

戦後における古典学習指導の展開は、次のような特色を持っている

る。①一九七〇年代以降、「典型概念としての古典観」から「関係概念としての古典観」*¹⁵へと展開した。②学習者を学習主体として学習指導に定位置した。③古典との対話による学習者の価値の創造、認識の深化、自己変容・自己成長が求められるに到った。④上記①②③に基づき、古典学習指導の充実を求めて、次の方法が採られるようになった。ア 学習者の興味・関心、問題意識に培う学習指導。イ 古典や関連する文章の教材化。ウ 教材と学習者との効果的な出会いと関係性強化の工夫。エ 古典の価値の創造的発見。オ 学びの方法を身に付けた主体的な学習者の育成。

Aの一九八八年度以降の古典教育実践は、古典教育実践史の一九八〇年代以降の展開に重なり、それを充足させるものであった。

〔注〕

* 1 渡辺春美「あとがき」（渡辺春美『国語科授業の活性化の探究 Ⅲ―表現指導を中心に―』二〇〇二年三月 溪水社 三八七―三八九頁参照）

* 2 * 1に同じ（三八八頁）。

* 3 * 1に同じ（三八八頁）。

* 4 渡辺春美「序章 国語科授業の活性化を求めて」（渡辺春美『国語科授業活性化の探究 Ⅱ―古典（古文）教材を中心に―』一九九八年八月 溪水社 三頁）

* 5 渡辺春美「あとがき」（渡辺春美『国語科授業の活性化の探究―文学教材を中心に―』一九九三年八月 溪水社 三〇四・三〇五頁）

- *6 磯貝英夫「文学受容の主体性の問題」(西郷竹彦・浜本純逸・足立悦男編『文学教育基本論文集』3)一九八八年九月 明治図書 三二・三六頁)
- *7 大江健三郎『新しい文学のために』(一九八八年一月 岩波新書 三二・三五頁)
- *8 浮橋康彦「古典教育の重視と新生面」(『月刊国語教育』一九八九年五月号 東京法令出版 六〇頁)
- *9 関口安義『国語教育と読者論』(一九八六年二月 明治図書)
- *10 益田勝実「古典文学の教育」(西尾実編『文学教育』一九六九年八月 有信堂)
- *11 長谷川孝士「中学校における古典の学習指導」(長谷川孝士編 著『中学校 古典の授業―全国実践事例―』一九七三年十二月 右文書院 八頁)
- *12 渡辺春美「『伊勢物語』『みやびの世界を歩く』の試み」(*4に同じ。八六頁)
- *13 増淵恒吉「教材研究法序説」(『国語科教材研究』(一九七一年四月 有精堂 二〇二七頁参照)、田近洵「国語学力論の構想」(『国語科教育』1 国語学力論と実践の課題』一九八三年二月 明治図書 三九〇五六頁参照)
- *14 渡辺春美「国語科授業活性化の試み―『枕草子』の学習指導の場合―」(『研究紀要』三三二号 一九九六年三月 大下学園祇園高等学校)
- *15 「関係概念」については、古典は、主体的に、ことばの契機をとおし、文学として機能させることで、現代を生き抜き、未来

を開拓するエネルギーを得る時出現する、関係概念・機能概念とする益田勝実の古典観によった(益田勝実「古典文学の教育」、西尾実編『文学教育』一九六九年八月 有信堂 二五六・二一五七頁参照)。

(高知大学教育学部)